

經濟原論の一試案(その一)

小林 彌六

はしがき——マルクス経済学の意義とその前進

マルクス経済学の沈滞が嘆かれるようになってからすでに十年位にはなるだろうか。永年この流れの学問研究に携わつて来た者として卒直にいつて大変に残念なことである。同じような気持の人々もマルクス経済学界には多くいると感じられる。今更そのことについてあれこれ論じる必要はないと思う。とはいえわが国の経済学の大きな特徴に、これまでマルクス経済学の諸方面での精力的な研究が積み重ねられて来たという事実がある。事実大多数の大学でマルクス経済学の研究者・教官がスタッフとして多数活躍して来ており、また現在もそのことに変わりがないのである。

マルクス経済学がそのように重視され大切に扱われて来たことは、経済学とりわけわが国の経済学の発展にとつて大きな意味を持つて来た。別の角度からいえばこれは新古典派の経済学やケインズ経済学あるいはマネタリストの経済学などさまざまな経済学の流れがあるなかで、古典派経済学の発想というか理論の流れが残り、ある意味では発展させられて今日に伝えられたことでもある。上述のさまざまな経済学にはそれぞれ長所もあり、あえていえばまた弱点もある。古典派経済学にしても、その例外ではなく、数理的な理論構成についてはワルラス・パレート以来の新古

典派に譲つていゝるというようなことは確かにある。ただ価値ないしは所得の形成と分配というような論点では、利点というか長所がかなりあると筆者は考へて來てゐる。

古典派経済学とマルクス経済学とがもちろん同じというわけではない。マルクスによる経済学批判がおこなわれて『資本論』に結実するマルクスの経済学体系が生み出された。貨幣・資本理論や剰余価値論、あるいは価値・価格論その他にもマルクスの経済学の特徴がある。ケインズ経済学や新古典派の経済学にはそれらの特徴はない。もちろんマネタリストの、あえていへばかなり単純な理論にもそれはないのである。

さまざまな経済学の興起があり流派があるなかで古典派経済学なりマルクス経済学なりが、わが国でもまた東西二つの世界にわたつても引き継がれ発展させられて來てゐることは経済学の発展にとつて大きな意味をもつはずである。さらに付言するところのことはたんに理論として学問研究として意義があるだけにとどまらず、実社会の運営にとつても大切な意味がある。端的に表現すれば、さまざまな実社会の問題の処置にたいしてあるいは未来社会にかかわるさまざまな問題にたいして、どのように考へたらよいか、あるいはどう処すべきであるかの指針を与へうるものなのである。幾分か象徴的に表現するなら、政策論として役立つ側面もあるのである。

この辺の事情に本稿では多くの紙幅を費す気持ちはない。端的にいつて、実社会にたいしてこうあるべきであるとうすべきであるという政策立案をするという目標に心奪われて、理論的な認識が歪められては困る。そのようなことのないように、あるいはできるだけ少ないように努力することが大切である。しかしその危険を心配するあまり経済学あるいは経済の理論的な認識が政策論とどのようにつながるのかを忘れてしまつては、卒直にいつてなんのために経済学をやるのか訳が判らなくなつてしまふ。

大半の、というか殆どすべての経済学が実社会にどう取り組むのかを大切な課題にして来た。またそれは当然のことである。現実の認識ももちろん大切である。過去にどうであったかをよく理解し認識することも大切である。ただ社会科学の一分野である経済学は現在について、というより正確に言えば今後の将来についていかにすべきかのSollenあるいはHow toの学問でもなければならぬだろう。社会がまた人間がもとめているのは、また経済学にもとめられているのには、そのような側面もある。というよりはそれが経済学にたいする期待であろう。知るためには役立つが、それ以外には役立たない学問では困るのである。はじめにも記した通り、ここでは幾分か卒直な考えを記させて貰おうと考えてペンを執っている。マルクス経済学の不振がはつきりとした現実になっているだけに、これまでの発想にとらわれすぎない思索の努力が今は真にもとめられていると感ぜられるからである。

何時の時代でもそうなのだと思うが現実の社会の動きや人々の真にもとめているものに真剣に注目し、時代のまた人々のもとめているものに答えるべく努力をしない学問はやはり生気を失なうほかないであろう。徒らに過去の記憶を反復するのでは、またその微細な修正だけに熱中しては、またそれで事足りりとしては、過去のある時期にある時代に熱烈な関心の集まる所となり広範な人々の支持をえていた学問でも、結局は支持を失なってしまうのがならわしだろう。

時代の歩みにあるいは歴史としての現実の鼓動に真剣に耳を傾け、あるいは直視をして、その要請に答えられる理論のまた学問の構築・向上に努める努力が忘れられてはならぬだろう。それは過去に出来上がったものの微調整によることもあるだろう。しかし本当に現実の社会のまた時代の要請にマッチしたものは、やはりかなりオリジナルな貢献を含むものでなければならぬだろう。経済学に限らず社会科学の諸分野のこれまでの歴史を見てみれば、それはす

ぐ判る。経済学についていえば経済学史を学んでみれば、誰でもそれはすぐ判る。

経済学は事実にかかわる認識の学でもあるけれど、How toの学でもあるだろう。といつてもこれがすぐにRevision(変革)の学であるとは限らない。マルクス経済学では「理論と実践」ということで、実践とはとかく革命的な、つまり社会体制の変革のための努力・行為というように考えられがちであった。だが、今、注意せねばならぬのはSollenといふHow toの理論といつても、多くはむしろ政府その他の公共体の政策あるいは各種団体のそれであることが多い。多くは体制変革とは別の次元のいわば日常的なHow toの理論だということであろう。それこそがじつは今日強くもとめられているものだといふことができよう。近代経済学はその目的をもつ学問であるけれど、マルクス経済学はそのような目的は持たぬというわけではない。繰り返しになるがマルクス経済学が熱烈な関心事となり支持者をもつていた、またいるといふことは、体制の変革をも含むものではあるけれど、日常の政策(policy making)にそれが有効である、大変に貴重な拠り所になっていたからでもあろう。

初心に戻つてその辺の事情を想起してみることが大切ではないだろうか。十九世紀以来それは労働者・市民・大衆運動の指針でもありえたけれど、またドイツの社会民主党やある意味ではイギリスの労働党、さらにはソ連・中国など東側の諸国のpolicy makingのための学問でもあったといふことである。

マルクスやエンゲルスが政府のおこなう政策のための理論と考へなかつたからといつて、マルクス経済学がそのような学問であつてはならないと考へる必要はいささかもないのではなからうか(レーニンらにもいろいろな例がある)。社会民主党の政策はマルクス経済学ではないといふように狭く自己限定しすぎては、マルクス経済学のひいてはマルクス主義の通用する範囲を自ら局限する結果になるだけではないだろうか。経済学批判といふことはもともと公

式主義で満足しないということであろう。それが公式主義に陥ってしまったのは、ミイラとりがミイラになってしまうわけで、魅力が乏しくなるのも致し方がないであろう。例外は沢山あるけれど、相対的にさまざまな学問にくらべ公式主義に傾きがちになっている印象があるのは残念なことであろう。

マルクス経済学が初心にもどり、その特質を見直し、また経済学のいろいろな流れや、社会科学・人文科学などの展開の中に立って、活性化の努力を試みるのが今は強くもとめられていると思う。筆者は近年、史的唯物論の吟味・検証という仕事、いわば歴史観ないしは世界観を現時点において問い直してみる仕事をして来た⁽¹⁾。

また経済政策についてどう解するか、あるいは経済や社会の現状をどう理解するかというような仕事にも力を注いで来た⁽²⁾。

本稿では現代を認識するための学問である経済学さらに焦点を絞つていえば経済理論・経済原論(マルクス経済学)の、現時点での組み立てを試みるとしたらどういう形や内容になるのだろうかということである⁽³⁾。永年、経済理論の研究をして来ながら、この点はこう考えるのがよいのではないか、こう理論化すべきではないかという論点⁽⁴⁾が筆者なりに蓄積されてきていた。部分的にはこれまでいろいろな書物や論文を書くおりに記したこともある。ここでは幾分か卒直にその内容を具体的に記してみようと思う。本意はあくまで経済学の有効性を保つためのまたそれを増すための努力である。読者諸賢の海容を希う心や切である。

- (1) 歴史観・社会観・世界観の研究については、小林「史的唯物論の適合性」(上・中・下・続『筑波大学経済学論集』第一二・一三・一四・一七号所収)また最近のものとして「史的唯物論の適合性・続論(一)」(『筑波大学経済学論集』第二十号所収)がある。このテーマ

については今後も論究の予定でいる。なお、最近の論文として、斉藤悟郎「市民社会と共同体及び国民」(1)(2)(3)(4)、「新潟大学経済学論集」39号・40号・43号・44号が意欲的な仕事として目につくもの一つである。

(2) 例えば、「売上税・円高・緊縮財政」(「朝日ジャーナル」1987年3月20日号)「小林」(「日米経済関係―摩擦と協調―」(「日米摩擦の構造要因と対応策に関する学際的総合研究」昭和61年度文部省特定研究経費、研究成果報告書、昭和62年3月所収)など。

(3) 経済原論・経済理論をも含めて、経済学をどのように研究するか、あるいは体系化するかという経済学の方法論について、筆者はさまざまな機会に論じて来た。近年のものとしては、「論理的純粹化」(抽象と経済原論)(山口・平林編「マルクス経済学・方法と理論」所収)、「経済学の課題と経済理論」(筑波大学経済学論集「第一八号」所収)がある。

経済理論は全体としての資本主義経済ないしは市場経済からの論理的な抽象によって構築される、と考える方向に筆者の経済理論観は進んでいる。

(I) 資本主義の基礎前提 —— 根本にある価値観

まず資本主義経済あるいは資本主義社会の基礎となる前提は何かということについて考えてみよう。思いつくままに記してみる。(イ) 土地や工場設備・機械・資本・店舗などの私有 (ロ) 経済行為の自由やそれを含む各種行為の自由、人格的自由・人種が認められていること (ハ) 労働することによって収入を得て生活する人々つまり勤労者がいること (ニ) 交換・流通が広い範囲にわたっておこなわれていること、貨幣が使われていること、利益を追求する営利活動がおこなわれている。

上に列挙したような事項が100%行きわたっている必要はない。また実際には行きわたっていることはない。国有地などの公有地があつたり、経済行為にもいろいろな規制があつたり好悪があつたりする。一口に資本主義社会といつても実際にはさまざまなタイプがある。政治制度をとつてみると、欧米諸国のように民主主義もあれば、途上国にま

だかなり多い、独裁制もあるし、ときにはファシズムになっていることもある。このあとのほうのケースでは人格的自由はいろいろ制約されているだろうし、経済行為あるいは経済活動についても諸々の規制がなされていることもある。

ついでながら一つの社会を問題にする場合、それがさまざまな側面をもっていることはつねに念頭に置かねばならない。経済学者やエコノミストは普通、経済的側面から社会を見ることが多い。ある意味ではそれはアプローチの角度的問題だから当然ではある。法学者は法律のサイドから、政治学者はまた政治のサイドから社会を眺めているのである。またそれぞれの角度から見えるもの、譬えていえば景色、をわかりやすく整理して説明する。分析する、あるいは記述するのである。

ただ経済学者が見るのは通常、経済の角度を切り取って見るかたちになっているので、同じ仕組みだと見えるものでも、例えば米国と日本では社会の仕組みは実は大変に違うのだということがある。現在でも少し形をかえて根を張っているのだが、戦前の日本資本主義論争で熱心に論じられた「半封建制」といわれるような事柄は、同じ資本主義の国とはいってもこれらの二つの国の社会状態を大変に違うものにしてている。ビルディングやハイテク機器などは同じでもこれらを取り込まれている社会というか、人間関係にはじつは大変な違いがある。

ところでこの論稿でまず注目してみたいと考えているのは、資本主義社会の基礎前提にあたる少し別の事柄である。いってみればそれは心理的なもの、精神的なものとでも表現できる要因である。マルクス経済学ではこの種の論議のばあいにはこれまで何を重視して来たのだろうか。一概に断定はできぬけれど所有のタイプ、もう少しつめていえば生産手段の所有の様式が非常に重視されてきたとはいえそうである。生産手段の所有の型が生産の型というか、生産様

式のタイプを決めると考えられる傾向が強い。これは史的唯物論の公式の適用から来しているのかもしれない。ところで生産様式や生産関係がどのようなタイプに決まるかは、生産手段の所有のタイプだけで決まるといえぬ面もある。それ自体が政治制度・政治関係や社会関係などから定まることもいくらでもある。というかそのほうが多い位である。生産手段と生産力水準との対応関係という点も、史的唯物論の公式が考えがちなほどに絶対的なものではないだろう⁽¹⁾。

さて心理的な要因という点であるが、端的にいつてこれは貨幣にたいする無限といつてよい程の強い希求心があるということである。拜金主義といつても良いものだろう。マルクスは『資本論』でこれを「貨幣物神」・貨幣フェティシズムつまり貨幣にたいする物神崇拜性として論じている。どうして貨幣についてこのようなことが起きるだろうか。それはもちろん経済学のあるいは経済理論のメインテーマの一つである。といつてもいわゆる近代経済学遡つてはマルクスやエンゲルスが経済学批判の主たる対象としていた古典派経済学では一般にこのテーマにあまり強い関心が払われていない。ただ貨幣が近代のまた現代の経済で極めて大きな役割を演じていることからすると、やはり本腰を入れた考究がなされるべきであろう。

いわゆる貨幣物神つまり貨幣についての物神崇拜性がどうして起こるのか、あるいは貨幣が他のさまざまな財貨とは違つて特殊な意味をもつ物と広くみなされるのは何故かについての説明もいろいろある。マルクスが『資本論』の価値形態論で展開した説明は筆者もかなりの時日をかけて研究したことがあるが⁽²⁾、それはいわば貨幣の成立を理詰めに説明できるという仕方である。一商品の所有者が他の一商品によつて自らの商品の価値を表現するのが簡単な価値形態である。これが発展したものが貨幣であるという。貨幣が特殊な意味をもつものと考えられるのも人間の行為

の結果であり、したがってまた合理的な根拠があると解されている。

これにたいして貨幣は交換価値のあるいは富の象徴として、あるいは記号として生まれたものだとする説明も有力である。文化人類学など、あるいは記号論の観点とでもいうべきものであるが人間が経済行為その他にとりまぎまぎ意味の象徴を使用することはポラニーらも注目するとおりよくあることなのである。それは人間の心性に根差すことということができるだろう。さまざまな象徴とかアイデンティティの記号・シンボルを人間はよく使う。それは人間の心性から発するいわば人間性のある側面から生じるとでもいうべきもので、たんに理詰め*の*いわば合理的な出自をもつものとも違う。^④

貨幣がこのような系譜のものであることはすべて否定されるべきものではないだろう。そのようなものとして説明できる可能性は十分に認められるであろう。だがこの論点について今詳しく立ち入る紙幅はない。

近・現代の社会では、あるいは資本主義社会ではその出自ともあれ貨幣に対する異様といつてよい程に強い人々の関心集中がある。たまたまこの原稿を書いている時期にはリクルート疑惑に社会・政治問題として関心の輪が広まっている。金権政治というわけで政治にも拝金主義が非常に広がっているのである。それはともかく貨幣をもとめて大勢の人々が大変な努力をしている。生活のために要する収入を確保するためにそうする人々が多い。だがそれだけでなく資産を増やすために貨幣を手に入れる努力をする人々もいる。企業活動の目的はいうまでもなく利潤を獲得することである。何故そのように無際限といつてよいほどの努力をするのだろうか。企業のオーナー、経営者・株主、これらの人々は勤労者とは違って贅沢・豪華な暮らしをしたいのでそのように貨幣を沢山蓄積しようとする面もあろう。さらにそれを越えて資産を無際限といつてよい程に獲得しようとする希う気持ちもある。もちろん資産をまた富の大きさ

を互いに競い合うという、競争心・名譽心がこれに絡んでいることもあろう。富や権力に対する欲望は人間の心性において非常に根深いものがあるようである。

資本主義社会で人々がより多くの貨幣を獲得しようとする、資産を増やそうとする。貨幣をもつていればさまざまな財貨や不動産も買える、サーヴィスも買える。貨幣はまた富の象徴である。そのようなかたちで貨幣と富と権力をひたすらに追求しようとする人々が多いといえるだろう。より多くの貨幣を追求するということは富と、権力つまり他人に対する指図する力いい換えれば支配権を獲得するということでもある。

拜金主義といひまた富と権力に対する無限といつてよいほどの熱烈な追求心が、非常に根強く広がっている。「有産者」あるいはいわゆるブルジョアジーについてはこれは一般的である。それだけではなくそれほど強くはないにしてもまたそれによつて得られるものは有産者あるいはいわゆる資産家とは較べものにならないが、おそらく社会の九五パーセントをこえるといつてよいであろう一般人、言葉をかえれば労働・勤勞によつて生計を立てている人々の間にも、拜金主義ないしは富に対する強い希求が広がっている。

資本主義社会がそのものとして成り立ち持続している限りにおいてはこの種の心情が非常に強くあること、あるいは行き互つていることがじつは極めて大切な要素なのである。この富に対する追求心・致富欲・貨幣に向かう追求心がなければ、たとえ(i) 工場の設備や店舗の私有があるにしても資本主義にはならない。(ii) 経済行為の自由や人間の自由が認められるにしても、それだけでは資本主義社会にはならない。あるいは(iii) 労働によつて収入を得て生活する人々がいても、それだけでは同じ結果なのである。

近代経済学の系統の議論や思索ではあまり体制論に力を入れていないのでこの辺の事情はそうつめられていないよ

うである。資本主義社会は何故に資本主義社会であつて、他の社会ではないかについてきちんとした考究がおこなわれていない。一方マルクス経済学は唯物弁証法に関わりもあり、あまり人間の心性・心のあり方や精神の側面に重きを置いてこなかった。財貨とか土地とか貨幣とか客観的なものとしてとらえやすい事柄に力点を置いて考究する傾向がある。それはそれで良い面もあるけれど、それだけに徹底してよいかといえやはり問題が残るのである。

すでに述べたとおりさまざまな他の条件が存在するにしても人間に上述のような心の傾向がなければ資本主義社会にはならない。この要素はそれだけの重要性がある。別のいい方をすればすでに挙げた他の種々の要因があるにしても、さらに上述のような心の特徴・精神的な特徴がなければ市場経済あるいは交換経済の社会になることはあつたとしても、資本主義にはならない。

言葉を換えていえば資本主義社会の基礎前提には人々の「一定の価値観」が横たわつてゐるということである。史的唯物論のアプローチでいえば、生産力の発展段階や所有の様式・タイプが重視されている。しかし筆者が今、記しているような価値観についてはさして重視してはいない。あるいは前者があるからその上部構造の一つとして価値観が生じると考えるということなのだろうか。ただそういい切れるかどうかそこに疑問がある。

金銀財宝というか富をひたすら大きくすることに最高の価値を置く人々が多数派である。あるいは貨幣に非常な価値をみとめてその出来るだけ多額を獲得しようとする人々が多数いる。あるいはそのような人々が支配的な立場に立つてゐることが資本主義社会の条件である。または富を獲得することと関連して他の人々に対する権力あるいは名誉心などの優越性をえることに強い関心をもつてゐる人々が主導的な立場に立つてゐることがこの社会の目立つ特徴

といえるであろう。

さらにつけ加えていえば、上記のような価値観をもつ人々が多数派であることあるいはそのような価値観が支配的であることは人間社会の状態として決して当然とはいえないということである。前近代の社会では致富欲があつたにせよ今日のように無際限というのでなかつたと解される面もある。とくに拜金主義というか貨幣物神についてはそういうえるだろう。ついでながら、前近代の歴史時代には権力欲や物欲が社会のあり方を決める有力な要因になつていたといえようか。つまりこれらの心性の強い人々が人々に対する支配権を確立するというようなことがあつたようである。さらに前近代と近代とについていえば近代では権力欲は前近代ほどに直接的ではなくかなり潜在的な形になつており——市民革命や民主主義制度の成立による——、また近代では物欲が商品経済の発展とむすびについており自然経済でのそれつまり領土や知行・封土の獲得などはちがい、貨幣の獲得をつうじて実現される物欲という面が濃厚である。

「価値観」というか権力欲や物欲の全面開花が人間社会が記録された歴史をもつ歴史時代に入つてからの大きな特徴といえよう。もちろん文化・教養・信仰などのいわば真・善・美などへの欲望もかなり働くようになってはいるが、権力欲や物欲にくらべると、まだまだ影響力が小さい。

歴史時代以前の未開社会においてはどうかだつたらうか。権力欲・物欲などはもちろんあつたのであるが、抑制され潜勢化していたということであろうか。文化人類学・歴史学などが教えることからそう解されるだろう。

心性ということが問題になつてはいるが、またこれは人間とは何かというテーマ——筆者も経済学研究・社会科学研究ひいては実社会についての観察・考究から、このテーマが非常に大切であることを改めて学んだ——につうじる。

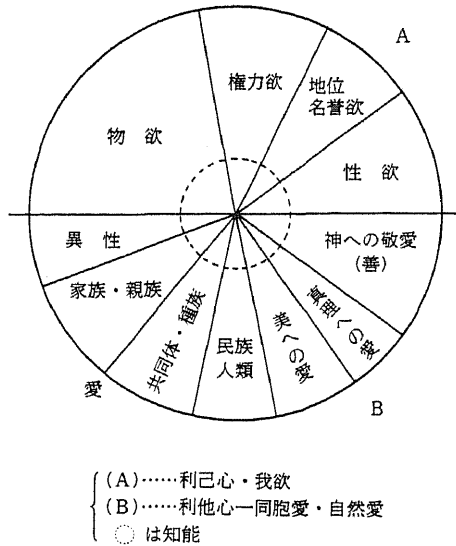
このテーマは人文科学・哲学・人間論などでは当然ながらさまざまに研究され論じられてきた。ただこの研究が経済学など社会科学とまだまだうまくむすびついていない。人間が社会を作り、社会を社会科学が研究するのであつてみれば、社会科学は社会を理解するためにも人間を理解せねばならぬだろう。経済学ももちろんその例外ではないのである。

経済学では従来、多くの場合ホモ・エコノミクス(経済人)という形で、実際の人間のなかから経済それも純粹に経済的と考えられる側面を切り離して論じ研究の対象とすることをしてきた。それによつて非常にクリアに抽出でき画き出せる事柄もある。その反面、そのためにそぎ落し、看過する結果になつてしまふものもある。

いずれにせよ現実の人間をこれまでよりもずっと鮮明にかつ積極的に採り上げ、その行動様式とか傾向性とか、心性を真剣に考究しそれと社会のあり方とかかかわりを研究せねばならぬだろう。

近・現代の社会・経済的にいえば資本主義社会といわれるものがそのものとして成り立っているということは、上述のような心性あるいは価値観が根を張っているということである。すでに述べたとおり注意せねばならぬのは、このような価値観、心の傾向性あるいは物欲中心の心性が人間と社会にとつて絶対的ではないということである。人間にとつて財産や資産や土地など最高の価値があるものなのかどうか。これが絶対的なものであるかが鋭くかつ広く、普遍的に問われなければならぬということである。人間にとつて真に価値あるものが別にあるのではないか、権力であろうか、名誉であろうか、それともつと別の価値あるものがあるものであろうか。

図(1) 人間の心一価値観の図式



しばしば人々の心を占めるのは物質への欲望であったり、地位にたいする欲望、名譽欲、あるいは各種の快樂であつたりする。その多くのもがその欲望充足の素材の奪いあひないしは競争につうじるものが多い。他人に分配されるものをできるだけ沢山自分に集中しようとする心とそれにつながる行為、これが近・現代の社会の状態を強く規定してきたといえるだろう。A・スミスがいう利己心(Love for oneself)とりわけ物質・貨幣に対する欲望というか、それに主たる価値をみとめる価値観が資本主義社会を支えている。注意されてほしいのは、このように利己心だけが評価される心性ではないということである。あるいは端的にいつて物欲だけが他にそれに優る人間的な心性はない、といった類のものではないということである。

ついでながら経済にかぎらず近年はいろいろな面で利己心にもとづく我欲の追求が非常に根強くなっており、また広範に広がっている。ゼロ・サムゲームというか限られた資源の奪い合い・競争が社会生活のライト・モチーフになっている感すらある。

この状態は人間の生き方として正しいものではなく、また社会状態あるいは社会の仕組みとしては正しいものではない。人々にとって他人はゲームのライバルであり、そのゲームに人々が精力を使い果たすというのでは決して賢いことではない。これとは逆に人々は互いに同じ人間であり同胞であるという事実^に真に目醒めることがおそらく極めて重要であろう。他人もじつは自分と同じ人間なのである。他人はじつは自分であり、自分はじつは他人である。これは異なつた民族間(もちろん東西間)でもいえることなのである。自分を大切に思い慈しく思うということは、またそのように真に思うのなら他人を大切にせねばならないはずである。それはやがて自分にめぐってくるはずである。自分と同じように他人を大切にする、つまり同胞愛というか、他の人々にたいする愛とか奉仕とか、いわば互助、スミスの『道德感情論』とか、いわば Love for others が非常に大切なのである。この側面はもちろん人々の心の中にあるものである。またこの心が何故かあるということをもめぐつても人間論の大切なテーマがある。ただここでは立ち入らない。

なお物欲というか金銭欲というか資本主義社会の基礎になつている、利己心の一側面、つまりこれこそが唯物論と^{いうのであろうが、}これだけが至上の価値観とはいえないことである。この唯物主義とでもいうべきものは正直にいつてあまり上等な思想というか、価値感ではないということは記して誤りではないだろう。経済学では伝統的に良く知られているように「価値論」が大切なテーマの一つになつて来ている。

そのことが皮肉なことに価値観という経済学についても本当は大切なテーマがしばしば本格的な討議あるいは研究の主題となりにくかった原因であるのかもしれない。通例、価値論は価格論などと縁が深い内容の、端的にいえば商品・財貨の価値はどのように定まるかどのような内容があるのかというような論議として考究されることが多かった。いわば物やサービスなどの経済的な価値をめぐって論じられることが多かった。そのためか本稿が注意を喚起しようとしているような人間の心性においての価値観をめぐる考究がかなり手薄になって来た。この価値観が今後もっともっと積極的に考察され論じられていかねばならないだろう。

(1) 史的唯物論については、前掲の拙稿を参照して頂きたい。史的唯物論については公式どおりにすべて割り切ることとはできないという認識がいまは常識化している反面で、マルクス経済学界内にはまだ公式が依然として根を張っている側面もあるようである。これはあまりにも弾力性に乏しい姿勢といわざるをえない。公式にとらわれていたのでは判ることもわからなくなってしまう面がある。経済理論についていっても検討・考究を要することが探究し発見できなくなることも少なくないだろう。

(2) さしあたり、小林『流通形態論の研究』(青木書店)や『経済原論』(御茶の水書房)を参照されたい。なお価値形態論を展開するにあたって労働価値説を入れるかどうか、商品所有者の契機をどう扱うか等の論点が宇野弘藏や久留間鮫造の論争以来、意識されて伝えられてきている。さしあたり小林・三輪・宮寄・松崎・長谷部共著『経済原論』(学文社)など参照。桜井・山口・侘美・伊藤『経済学』II (有斐閣)

(3) この方向での貨幣起源論について、さしあたり、K・ボラニー『経済の文明史』(日本経済新聞社)やサーリンズ『石器時代の経済学』(法政大学出版局)、吉沢英成『貨幣と象徴』(日本経済新聞社)をあげておく。また間宮陽介『モラル・サイエンスとしての経済学』(ミネルヴァ書房)。

(II) 資本主義の基礎前提——商品・貨幣・資本の評価の仕方

(二)の交換・流通など資本主義経済の要因として特徴的なものについて論じよう。マルクス経済学は伝統的にこのテーマに力を入れてきている。それが社会的体制を吟味・論究する姿勢を保ってきたことと関係があるのであろう。近代経済学は一部をのぞけばこのテーマを熱心に研究するという姿勢においてやはり消極的である。またそこから来る限界も確かにあるといえそうである。ついにながら一言すると現代において経済理論ないしは経済原論の研究をするということはどのようなことだろうか、あるいはどのようなことが要請されるのだろうか。ありていにいえば近代経済学の諸理論・諸流派の吟味をする作業を省略することはできないのだろうか。

マルクスの経済学を模範にしていわゆるマルクス経済学の研究がおこなわれて来ている。それはそれで理由のあることであろう。そこからくる長所も多い。ただマルクスが経済学を生み出して行つた営為が「経済学批判」であつたことの意味はかなりよく咀嚼されてしかるべきであろう。現代においてまた将来においてマルクス経済学というか、批判的・科学的な経済学として発展し生命を保ちうるためには、マルクスが心血をそそいだように現代においてまた将来において経済学批判をおこないつづけねばならぬということであろう。あるいは社会科学その他の学問分野の成果の摂取と批判や学際的な創造を含めて発見と創造をどの程度おこなえるかにかかつているといえそうである。マルクス経済学というテリトリーを狭く決めてその枠のなかでのみ研究をするということにすると、しばしば公式主義的になつたり、またみずみずしい感性と創造力に乏しくなりがちになることもある。心せねばならぬことではないだろうか。

ところで交換や流通に関わりが深い商品貨幣あるいは資本について考えてみよう。まず商品について。

商品がなんらかの持ち主があり交換ないしは流通に投じられる、またさまざまな使用価値や交換価値があることは普通、考えられているとおりであろう。今ここで記したいのは商品というもの、あるいは商品というカテゴリーをどうとらえるかである。あるいは別の言葉で表現すれば財貨やサービスなどが交換されるもの、売買されるもの、商品となつていくことがどのような意味をもつのだろうかということである。

商品経済と自然経済という対比もある。生産された財貨が交換されてから消費されるのではなく、種族のなかであるいは家族のなかで消費されるというような経済のタイプが自然経済である。自然経済では財貨は商品にはならない。近代経済学はまた遡つては古典派経済学もこの近・現代経済の基礎的な構成要素といつてよい商品について、商品としての財貨の類型は歴史的ヴィジョンも含めてはたして何なのだろうかという考究ないしは吟味にあまり力をいれていない。

マルクス経済学では伝統的に商品の性格に注目している。財貨が商品であるのはどういふことか、財貨が商品となるのはどのようなことを直視して考えようと努力してきている。そこでもう少し立ち入つて考えてみよう。ありていにいえばこれまでマルクス経済学では、商品をかなり歪んだ物・表現を換えればいささか異常な物・商品フェティシズムと考える傾向が支配的だった。そこから商品経済や市場経済は歪んだ経済制度だという判断が支配的になつていたといつてよいだろう。それがまたいろいろな面で経済・社会観あるいは政策観にも反映してきていることはいうまでもない。

商品とは何かの吟味には殆んど意を介さず、いわば体制べつたり、それを天然現象のように受け取つて疑わないの

も困る。しかしこれまでマルクス経済学にとって支配的であったような考え方も、この辺で吟味が必要になっておりはしないかと筆者は何年か前から考えるようになっていた。マルクス経済学も今後の発展をめざすためには先入感にとらわれぬ見直しや発見の努力が必要なのではないだろうか。イノベーションは進歩につうじどの分野でも必要不可欠な行為なのである。

商品が一種特異なもの歪んだ物と見られているのは、一方で自然経済とそその中の財貨が普通の事であるという見方があることと関連する。自然経済と商品・市場経済とは全く異質だという考え方があつた。『資本論』で用いられているロビンソン・クルーソーの話『資本論』第一巻第一章商品では、ロビンソンは生活に必要な品々を自分の計画や工夫にもとづく労働で獲得する。採集・狩猟・生産するのである。これがずっと拡大し発展すれば社会主義ないしは共產主義の計画経済になると考えられている。ところでこのような計画にもとづき交換や流通によらないでおこなわれる経済生活・経済活動だけが正常で、交換経済は異常なのだろうか。また両者はまったくあいいれない程に異常なものなのだろうか。

取得した財貨を直接に自分で使用するのに比し、商品の使用価値はいわゆる他人のための使用価値である。有用性があるものを獲得し生産するといつても交換するために、いわゆる交換価値を獲得するためにそうするのである。貨幣を獲得するためにそうするのである。こうして商品について目的に顛倒性が見られると考えられている。このこと自体、全く否定はできない。だが翻つて考えてみると交換のために財貨を役立てるということはそう歪んだやり方、異常な仕方といえぬことかもしれない。

交換によつてさもなくば入手できない財貨が入手できることもある。交換すれば自分が生産した財貨を直接に使

用できぬかもしれぬけれど、他人の所有しており交換にさし出す財貨を入手してその使用価値を利用することができる。自分が生産した財貨の使用価値は自分のために役立たないが、他人のために役立つことになる。相手方はその享受によって満足を与えることができる。交換は見方によつてはギブ・アンド・テイクの関係とか、相互奉仕の関係だということもできる。交換がいらなければ、人々はただ自分のためにつくすだけにすぎない。自分の要求を自分でみたす努力をするだけである。ところが交換が中にはいると人々は互いの要望を満たすためにたがいに協力することになる。人々は全く孤立してはいるわけではない。それぞれの必要な要求・希望をみたすために他の人との合意にもとづく協力関係に入るのである。もちろんそれは強制によるのではない。契約がそうであるように自由意志にもとづく協力関係にはいる。この点が大切である。

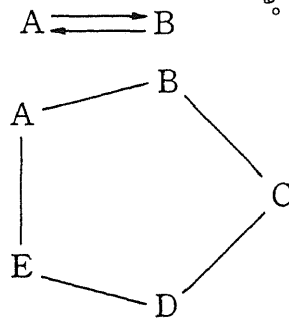
この関係は合意によりとり結ばれる相互奉仕の関係と見ることもできる。交換のさいに双方の当事者は獲得するものができるだけ多くなり、提供するものができるだけ少なくなるように努力することが多い。その点では利己的な動きであるだけに見えもする。しかし相手にみとめられ好まれるものを、またみとめられる分量だけ提供せねばならない。双方で質量ともに交換についての合意が成り立つ、いわば等価交換が原則なのである。パーの交換でたがいに自分の希望する財貨を入手することができる。均衡が成り立つ関係で、一方的な関係ではない。また自由に主体的な判断を行うことができ、交換によつてさもなくば利用困難な財貨を入手使用できるようになる。さらに独力で獲得・生産するよりは低廉に、どうか安く大量に財貨を獲得できることもしばしばなのである。

このように見てくると財貨を直接的に使用するのに較べて、交換のために用いることがそう異常なこととはいえない

い。もちろん麻葉など有害なものでも、交換できればよいというように行爲する異常なケースもないといえぬが、一般的にはそうはいえない。交換は(イ)のようなペア交換もあるが、貨幣のような仲介物が利用されるようになると(ロ)ようになる。交換の輪・相互交換の輪が大変に広がりスケールが大きくなる、また入り組んでもくる。強くいえば今日示されているように地球大の交流・交換の輪も織り上げられることもある。

図(2)

(イ)
(ロ)



交換価値を基準にする財貨の相互交換ひいては貨幣を基準にし尺度・媒介物にする交換はけつしてマイナス面ばかりではない。また誤まった財貨と人間との関係、あるいは誤まった異常な人間関係とはいえぬのではないだろうか。ついでながら言えば似た文脈の上で貨幣も顛倒したものとばかりはいえないのである。利用の範囲にもよるけれど一概に有害なもの無用なものとはばかりは断言できない。さすがに今日ではそれとすぐ判るかたちでこの種のテーゼが氾濫しているとも思われない。だが気を付けて見ると意外にまだこの種のテーゼが本気に信じ込まれている模様もある。一例を最近の文献から挙げさせて貰おう。「経済学の課題」を論じる文章のなかで置塩信雄氏は、(1) 諸

生産物が商品となるのは何故か。(2) 貨幣はなぜ存在するか、を経済学が問いつめねばならぬ問題だとしている(置塩信雄・伊藤誠『経済理論と現代資本主義』岩波書店18頁)。この問題設定自体はよいとしても、その裏には財貨は本来は商品ではないはずのものなのだ。財貨が商品になるのはノーマルな姿ではない。貨幣は異常なものなのだという発想が込められているように感じられる。炯眼なかつオリジナルな切り込みで印象的な研究成果をあげている氏にして、このようないわば公式主義的な理解に留まっているのである。

商品はもちろん財貨とは違う、市場をもたない自然経済とは異なる。だからといって商品や商品⇨市場経済が間違えたもの歪んだものと断定してよいか、じつは熟考を要するテーマであるといつてよいかも示れない。自然経済はしばしば非常に非効率的であり低生産性にとどまりやすい。技術の革新もなかなか起こらない、また起こりにくい傾向もある。社会主義ないしは共産主義社会で計画経済が整然とおこなわれ、各人の考え・希望も順調に満たされるようになる保証があるかどうか、既存の社会主義の経験をあわせて綿密に考究すべき事柄であろう。個々の構成員の細密な希望・考えがどれだけ実際の経済運営に生かされるかを考えると、そう楽天的にばかりは見通せない。一般的にいつて在来の社会主義論は経済的な角度からばかり考えられすぎている傾向が強かったのではないだろうか。社会的な意志決定において、各構成員の意見・希望とのバイアスが非常に大きくなりやすいことについてきちんとした吟味や考究が欠けていてならないように感じられるが、どうであろうか。

交換行為あるいは商品交換は、また自然経済あるいは各種の共同体の経済生活とは全く異質のものだろうか。種族の生活あるいは家族の生活ひいてはさまざまな共同体の生活も大きくみれば各種の交換から成り立っているといえぬことはない。それぞれが一对一の等価交換とはいえない。したがってお互いあまり知らない者同志の、その場かぎ

りの一回かぎりの交換ではない、共同体内の互いに顔見知りの人間の間の、性別・年齢その他による役割分担ともつながら、一種の相互扶助・交換が行われているということではないだろうか。

共同体の内部ではなく共同体と共同体との間でも友好のしるし、あるいは外交関係・相互関係として交換があることはよく知られている。

このように考えてくると交換とか商品とか貨幣は、マルクス経済学で普通考えられてきたのよりは共同体にあるいは人間の社会生活に内的な関わりが深いものであったのではないかと感じられる。諸者諸賢の忌憚ない御意向を戴きたいと願っている。今もとめられているのは、なんらかの公式やイデオロギーによる判断ではない。弾力的な思考による真理への接近の努力であるといえよう。

人間の生活は殆んどすべての場合といつてよい位、社会生活をするという形をとっている。ということは大切な一面として人と人との協力・相互奉仕いわば友愛・同胞愛の関係があるということである。すでに述べたとおりそれぞれの役割分担があり協力があり広く解釈された場合の交換があるということである。ただしそのばあい人には心をゆるせる人の範囲が通常限られていること、また人間にはかなり強い「利己心」ないしは我欲があるということが注目されねばならない。人と人との関係にはホットスがいっただように万人の万人に対する「闘争」の側面がある。

これをもう少しつめてみよう。すでに図示したように、人間にはかなり強烈な我欲がある。それを非常に強くとれば荀子のいう性悪説でもいうものにあたらうか、私見によればこれは人間の性(サガ)がもともと擻猛だということではないと思う。注意すべきは人間が高い知能を具えていることと、これが関係があることであろう。というのはこの高い知能が良い方向にも悪い方向にも利用可能なことである。後者に利用されれば悪知恵ということになるのであ

ろう。前者は本当の知恵ということだろうか。通常知能が高いということは知恵につうじると考えられている。しかし実は悪知恵にもつうじる所に人間とその社会のいろいろな問題が生じたといえるだろう。現在もまた残念ながらその例外ではなさそうである。

人にとって他人との闘争・敵対の側面がつき纏っているかぎり、協力・相互扶助の関係が成り立つためには人と人との間にアイデンティが成立していなければならない。人と人との心を一つに結びつけるなにかがあることが望ましい。それが種族や一族の紋章であつたり神であつたり祭りであつたりする。また首長であつたり象徴的な器物であつたりする。貨幣についてもこの種の象徴であることに由来をもとめるのもまったく理由がなくはない。それが純粹に経済的なオリジンをもつといい切れるかどうか、人類学などから示唆されるとおりである。もともとこのような方向性をもつ貨幣理論にたいし、マルクスが価値形態論で試みたのは価値表現あるいは商品所有者の交換のための意思表示の結晶として貨幣を説明しようとする試みであつた。いわば理詰めには貨幣のオリジンが説けるとする理解のデモンストレーションだつた。労働が一定の状態・条件の下で価値の実体になり、貨幣はまたその価値の象徴であると解する。こうした貨幣理論は傾聴に値する内容だといえる。ただその有効性については今後とも吟味がもとめられるテーマといふべきであろう。徒らに価値形態論の公式を繰り返すだけで足りるかどうか、再考が要る点であるだろう。叙上のとおり商品や貨幣については財貨そのものと区別されてしかるべきものであつても、商品フェティシズムとか貨幣フェティシズム(物神)という言葉ですべてにマイナス面とみうるかどうかに関して、今後やはり慎重な考究を要するところであろう。商品・市場経済にはまた自動調整能力も付随しているのである。

問題はむしろ商品・市場経済の利用の仕方なのかもしれない。とりわけそれは貨幣にたいしどのような態度をとる

か、あるいは貨幣によつて貨幣を増やすことにどのように関心をもつかにかかわってくる。貨幣を富の代表物と感じとり、貨幣を無限追求する。そのためにはさまざまな欲求の充足を抑制する、あるいは種々の犠牲を顧りみない。「蓄藏貨幣」にあたるもの、これなどは貨幣の通常な利用法をかなりはずれるケースが出てこよう。もつとも貯蓄はそれなりに正当な理由があつておこなわれる場合も少くない。

貨幣で貨幣を増やす、資本についてはどうだろうか。資本理論というか資本観は伝統的に経済学のメイン・テーマの一つである。もつともこの問題をあまりつきつめて考えようとしないうちもある。マルクス経済学あるいは批判的経済学はもちろん非常にこのテーマに力を入れて来ている。ややシエマティッシュに言えば貨幣は倒錯したものだという理解があつてそれとつながり資本はその最たるものだというつかみ方がかなり支配的であるように見受けられる。資本性悪説とでもいふべきものであろうか。

要点を先取りしていえば $G \dots G$ というサイクルの経済行為というか企業活動はすべて悪なのかどうかという吟味が現在では避けて通れなくなつて見えるように見える。五〇六百年先あるいは何千年か先の時代に照準を合わせるというよりは、現代あるいは二十一世紀ないし二十二世紀位を念頭に置いて考えてみるとどうなるだろうか。幾分か足が地に着いたかたちでの論議も大切なはずである。

(イ) 利潤あるいは利子など利益を得ることや資本量あるいは企業資産などを増やすことが至上の目標として追求されること、資本主義社会では非常に多い。この目標のためには勤労者にどのような苦勞をさせても構わない。資源乱費や環境破壊が起こつても仕方がない。植民地支配で他国の人々を苦しめて仕方がない。儲けるためなら武器の生産を利用し戦争を利用して仕方がないというふうである。この場合には物欲万能^①というか唯物的な価値観が支配的

になっており、人間愛・自然愛・美や正義などについての適切な考慮が見失なわれてしまっている。富とか権力が至上の価値をもつものとして追求される。この場合には貨幣あるいは企業活動というものに触発されて価値観の倒錯がひどいかたちで起こっている。貨幣・カネや物質のほかに人間にとって大切なものがあることが広い範囲で忘れられている。いわばかなり野蛮な非人間的な状態に陥っていることになる。これが軸になっている資本主義・というか資本主義の害悪はこれまでマルクス経済学が中心になって研究し警鐘をならす役割をはたして来たともいえる。

ただここで注意せねばならぬのは、 $G \dots G$ の活動や企業活動がすべて誤まっており悪ばかりかどうかという点である。(イ) $G \dots G$ という資本資産の再生産・保全の活動はそれ自体としてはかなり大切な意味をもっているといえるのではないか。(ロ) 企業活動で利益をあげることは、そのみが自己目的になり他の種々の大切な事柄への配慮が失なわれれば弊害が大きい。ただし資本資産を保全し適切な利あるいは収益を上げる資産を増やすことがすべて悪であるとは限らない。(ハ) 上述のような点はある程度の水準に達した経済活動(企業活動)が普通内包する動きと違ってよいのだろう。貨幣を計算単位とする経済活動のユニットとその運営にとってそれが大切なこと、また国民経済をとって考えると、多数の自律的な経済ユニットを単位にする経済運営が大切なことは現在の社会主義国を見ていると良くなる。経済単位をどうするか、その運営をどうするのか、目標をどこへ置くのが、経済運営にとってもまた社会運営にとっても大切な政策上の課題になるのではなからうか。繰り返すことになるが会計計算単位であることを含めて流通の媒介物であり、また企業の計算単位である貨幣はかなり大切な要素ではないだろうか。収入・所得を得るといふことも大切なことではないだろうか。計算単位がない生まの経済運営は大変に粗雑なものになってしまうのだろう。家計のやり繰りひとつとつてもこのことはすぐ判るのである。

- (1) 社会主義観については、拙稿「現代社会主義が生き残る道」(『朝日ジャーナル』1980年12月19日号)、拙著『資本主義と社会主義』御茶の水書房「ネオ・デタントか冷戦か—ソ連社会主義の選択」(『道』昭和57年3月号)なお、社会体制論・社会思想批判の労作として次をあげておく。田中弥太郎「共存主義から見た—社会思想批判・政治批判・経済批判」(昭和五十八年)
- (2) 拙稿「商品経済観の見直しをめぐる一試論」(『筑波大学経済学論集』)

剰余価値の獲得について

近・現代の経済システムについて、その軸が企業活動にあり、資本の利益追求の運動にあるだけに、資本にとって利益がいかにして得られるかを解明することが大切なテーマになっている。経済学はこの課題をずっとかかえて何百年か経ち今日に至っているともいえる。ただしどの流れも同じようにこのテーマに向かったかといえ、必ずしもそうではない。重農主義や古典学派さらにマルクス経済学などはこのテーマにかなり力を注いで来た。いわゆる近代経済学についてみると、スラッフア・カルドアなど一部の人々を除くと、この剰余価値論や分配論についてはあまり積極的に取り組んでいない。クズネツツやガルブレイスなど実証的研究をする人々の間には自らこのテーマについての関心が現れている場合も多い。ただ全般的にいつてこのテーマの研究が手薄になっている印象は免れない。

ケインズ経済学に象徴されるように「失業」の問題には本腰入れての取り組みが見られた。だがその前の労働の価格ともいえる賃金はどのように決まるか、賃金とは何かというような問題にはつきりつめた研究は概して少ないように感じられる。さらに資本の利益は何故あがるのか、剰余価値はなぜ得られるのか、剰余価値がどのように生じるのかという問題になるとどうもすつきりした答えが得られない。価格理論の系論として少し頭をのぞかせる程度にとど

まりとか、利潤理論は利潤極大の原理に象徴されるとおり量的側面に関心が集中している。

剰余価値論は伝統的にマルクス経済学のメイン・テーマとされて来た。本稿の紙幅も残り少なくなつて来たので、ありていに述べるとする。資本にとつて利益はなぜ得られるのかという設問への答えは一般に剰余価値論として出されている。とすると正確な答えが出てくるかどうかは価値論の正否いかんということになる。価値論にもいろいろあるけれど、ここでまず問題になるのは労働価値論である。ついでながら価値論を考究するということがかかなり多くの場合に、価格論とも絡んでおり研究はそのためにまた複雑になるといふ事情もあることを付言しておく。

剰余価値論を探究することが価値論の探究にすり替つてしまうことを避けてこのテーマに接近する方法がやはり考えられてよいのではないだろうか。本稿ではそこで思考の方式を切り換えてとりあえず別の方向から経済学のこの重要なテーマに接近することにしてみよう。紙数に制限があるので詳細は次稿にゆずることとして、とりあえず記せばそれは、投入・産出の使用価値連関を中核にするマクロ的なアプローチである。個々の資本の運動が $G \rightarrow W$ $\left\{ \begin{array}{l} P_m \\ \dots \\ A_k \end{array} \right.$ \dots $P \dots W \rightarrow G'$ で表記されるとする。 P_m は生産手段、 A_k は労働力ないしは労働であるとする。 P_m の中には空気とか太陽光線とか無償の要素は入れられていない。有償な要素が数えあげられている。

$G' \rightarrow G \parallel \Delta G$ とし、 ΔG が正に(プラス)であるかどうかは W' の価格と W の価格との比較の結果による。これを解くことは、 P_m も資本主義経済制度の中では資本家的企業の産出物であることを考慮すると、 W や P_m の価格の論議をすることにつうじ、なかなか答えが出てこない。個別資本を社会全体で総計し、社会的総資本と総括する。これをまた $G \rightarrow W$ $\left\{ \begin{array}{l} P_m \\ \dots \\ A_k \end{array} \right.$ \dots $P \dots W' \rightarrow G'$ で表示することができる。やや先取りしていれば個々の資本に利益があがるとすれば、総資本についても利益があがることを意味する。

そこでこのことの意味をもう少しつきつめて考えてみるのが大切になる。賃金も実質賃金である生産物に置き換えてみると、総生産物(W)を作り出すのに投入される生産財や消費財の合計(W)とW'との比較が主たる問題になる。W - W' Δ Wの Δ Wがプラスである、つまりいわゆる「総生産物」がプラスになるということが利益ないしは利潤が生まれることの基礎になっている。WとW'との双方が有償の商品であることからその結論が出てくる。つまり双方とも商品として市場でプラスの価格がついて売買されるものであることから、このような結論になる。これはF・ケネーが経済表によって指摘した純生産物の概念に類似している。

別の観点から付加価値があるかどうかあるいは国民所得があるかどうかは、Wの中から労働者ないしは勤労者が購買し消費する消費財・実質賃金(W₁)を差引いたもの(W₂)を控除した残高がプラスであるかどうかにかかっている。このように付加価値があるかどうか、利潤ないしは資本の利益(企業の利益)があるということは、マクロにはまづもってこのような再生産というか産業連関というか、物財レベルの余剰(surplus)にかかっている。詳細は次稿にゆずることにしよう。

(未完)